

鏡を覗いた瞬間、息が止まった。

可愛いデザイン、可愛らしいデザインの衣装ではある。胸元は細いリボンと繊細なほしごレースで縁取られているし、フリルのついたカフスもスカートも安っぽさのない、綺麗なシルエツト。

（けどこれ……っ、いくらなんでも、露出多すぎるってえ……!）

肩も胸元も、背中も丸見え。

お尻すら透けていてまともに隠れていない。

慌てた私を制するように、背後に立つ男の人が声をかけた。

「よく似合ってるじゃねえか」

低い声がお腹に響く。

見上げるほどの長身に、皺一つない黒いスリーピースのスーツ。

啞えている紙の煙草からはゆったりと紫煙が燻っている。形の良い双眸は緩やかに細められ、まるで値踏みでもするかのような視線で私を捉えていた。

逃げられる気がしない。

私はただ、メイドカフェの面接に來ただけなのに。

……どうしよう、絶体絶命だ。



ろこもこうさぎ

絢辻 透

一時間前。

緑色の線路が横切る電気街の大通りを、希望に満ちあふれて渡っていたはずだった。

大通りから一本外れた道では、可愛らしいメイド衣装を着た女の子たちがチラシを配っていた。色とりどりのフリルに、パニエで膨らんだスカート、アニメの主人公みたいな可愛い声。

私もこの中に入るんだ……！ と勇んでメイドカフェの面接に来たはず——だったのに。

「うーん、九条さん、ちょっと……その見た目だと、うちのコンセプトと合わなくて」

「そ、そうなんですか……ううっ……」

困ったような顔をした店長らしき人に、撃沈の一言を貰ってしまった。がつくりと肩を落とす。

（はあ、どうしていつも、こうなんだろ……）

十九年間、今までずっとこうだった。

やたら良い家柄のせいで、お花や茶道も習ったけれどもうまくいかず、先生に怒られてばかり。

不器用で猫背で小柄、髪も整え方がわからなくてボサボサ、おまけに眼鏡。厳しい母親に「お前は本当に何の役にも立たないね」と言われ続けた日々。

（唯一、懂れてたものだったのにな……）

ずっと、あの夢みたいないな可愛い衣装に懂れていた。

あちこちにリボンをつけて、膝まで隠れるニーソックスで、可愛い声で接客をする、アイドルみたいな女の子。

そんな風になってみたくて、初めて自分の意志で面接の予約を入れたけれど——このザマだ。

落ち込んでいる私に店長さんが「ウチよりもっと雰囲気合う店があると思うんで……」と、フォローなのかお断りなのかよくわからないことを言っているが全く耳に入ってこない。

しょんぼりと顔を伏せていた、そのとき。

ぎいい、とバックヤードの入口の扉が開いた。

「……………！？ まっ、ままま、真壁さん！？」

「よう。ちゃんとやってつか」

頭を屈めて入ってきた男の人に、目が点になる。

慌てて立ち上がった店長さんよりもはるかに身長が高い。皺ひとつないグレーのシャツに黒いベストとストラックス。

艶めくワインレッドのネクタイはきっちり首元まで締まっていて、長い黒髪は後ろで束ねられ、さらりと靡いている。

（え…………？ な、なんか、危ない人……………？）

店内禁煙のはずなのに気にすることなく、紙の煙草をふかしている。

可愛いメイドカフェにはあまりに似つかわしくない姿で口が開いてしまった。

駆け寄った店長さんが小声で囁いている。そこまで広くないバックヤ―

ドなので丸聞こえた。

「真壁さん、来るときは仰ってくださいよ……！」

「バカ、言ったらお前ら俺が来るときだけしつかりやろうとするだろうが」

「そうは言っても、い、今面接中でして……っ」

「へえ？」

気だるげながら鋭い視線が、ゆつくりとこちらに向いた。

思わず固まる。どこか野性味のある男らしい整った顔立ちをしているけれど、やっぱり怖い。

煙草を挟んでいる指には指輪がたくさんついてるし、耳にもシルバーのピアスが複数揺れていて——正直、電気街というより新宿の裏路地が似合っ
いような貫禄をしている。

（かっこいい……っけど、ぜ、絶対やばい人じゃん……！！）

なぜ、こんな人がこんなところに。

肩を縮こまらせていると、またひそひそ声が聞こえてきた。

「雇うのか」

「い、いえ、ちよつとうちのコンセプトでは厳しそうというか……」

——そうだった。

店長さんの声に心が冷える。

この店にどんな人が出入りしようが、もう私にはちつとも関係がないのだった。

じわじわと惨めな気持ち がせり上がってくる。ぎゅつと膝の上で拳を握りしめ、立ち上がった。

落ちることが決まっている以上、ここにおいても迷惑なだけだろう。

「あのっ……わ、私、不採用ですよ。お時間取らせてすみませんでした、もう帰りますので……っ」

「——嬢ちゃん、ちよつと待て」

「……えっ??」

低い声で呼び止められてまた固まってしまった。

コツ、と先の長い革靴の音が響く。目の前まで迫った——確か真壁さんと呼ばれていた——その人は、変わらず気だるげながら、私の顔を射抜くように見つめて、そして。

突然、私の眼鏡を奪った。

「わぎやツ!？」

「……へえ。素材は悪かねえな」

「な、なにっ、なんですか、返してください……っ」

わたわたと手を伸ばしたけれど、眼鏡を持った手を高く持ち上げられてしまつてちつとも届かない。

ぼやける視界に顔が近づいた。

男らしい鋭い輪郭、形の良い引き上がった口角。

まるで見定めるような視線が、前髪から顎先まで、這うように動いていくの
がわかる。

そうして最後にニコ、と貼り付けたような笑みを浮かべられて、心臓が跳ねた。

「なあ嬢ちゃん。俺、この店のエリマネなんだけだよ」
「え、えりまねえ……っ？」

絶対嘘だ。

思わず疑うような視線で見上げてしまった。
少し甘さを感じさせるウッド系の香水と、煙草の煙の混じった——不思議だけれど嫌じやない匂いがした。

真壁さんはちつとも動じず、笑顔のままだ。

「系列店に嬢ちゃんに良さそうな店があるんだよ。どうだ、制服だけでも着てみねえか」

「けいれつてん??」

「そうそう。メイドっぽい、可愛い衣装もあるぜ」

先ほど店長さんと話していたのとは少しトーンが違う、甘くも白々しい声。

——絶対、こんな人についていたら駄目な気がするのに。

眼鏡を取られたままの私は、結局近くだという系列店まで案内されてしまったのだった。



開店前の薄暗い店内には、広めのソファアールがあちこちに並んでいる。低く艶やかなローテーブルに、氷用の入れ物とミネラルウォーターのボトル。

(どどどつ、どうしよう……!!！)

あまりこういうお店に詳しくない私にだってわかる。

これは——どう見積もっても、カフェではない。
絶対に、間違いない、お酒を提供する類のそれだ。

（し、しかも、これっ、衣装……ほとんど紐じゃん……！！）

こんな、よくあるエッチな漫画みたいな言い回しを、本気で思う日が来る
なんて。

ハンガーにかけられた衣装は確かにフリルやレースがついて、セクシー
というよりは、どちらかといえばオタク向けのコスプレのような可愛らし
い衣装ばかりだ。

けれどどれも露出が凄い。

とてもじゃないけれど、私には似合いそうもない。

真壁さんは後ろで黙ったまま慌てる私を眺めている。なにか面白いもの
でも見るような視線が痛い。

「あああ、あのっ、こっこんなの、むり」

「まあまあ。可愛いだろ？ 着るだけ着てみりゃいいじゃねえか」

震える声で断ろうとしたのに、言葉を遮られてしまった。

またコツリと革靴の音が響く。

身を乗り出した真壁さんがハンガーパイプに手を伸ばしてきた。

ごつごつした指輪の光る大きな指が、たくさんかけられている衣装の中からメイドモチーフらしきものを探していく。

「うちは衣装も本格派だぜ。あれだろ、メイドっぽいのがいいんだろ？」

「そ、うですけど……ろ、露出がおおすぎて……」

「水着みてえなもんだぞ」

「水着でもむりい……つあ？ あ、それ」

「これか？ よし、着てみるよ」

やばい。口が、滑った。

見たことのある衣装だった。よくチェックしているメイド服ブランドの、セクシー路線のラインナップの中のひとつ。

驚くほど布地が少ないのに数万円もしてサイトを見ながら「ひええ」と言った記憶がある。

——どうしよう。可愛いけど、紐すぎる。紐すぎるけど、可愛い。

ぐるぐる目を回して考えているうちに、ふっと、どこか柔らかな吐息にも似た笑い声が聞こえてきた。

「そんな怯えんなよ。無理に店出したりしねえから、ちよつと着てみるだけ。な？」

「うううっ、ぜ、ぜったい、うそ……っ」

「嘘じゃねえよ。ほら来い、お前、少し整えりやサマになる」
「え——？」

疑問符でいっぱいになっているうちに肩を抱かれてしまった。

振りほどこうと思えば振りほどけるほどの力加減だ。なのに掛けられた言葉に混乱して、そのまま奥のメイクルームのようなところに連れ込まれてしまった。

ぱちん、と照明がつく。

（ひゃ、で、でっかい鏡……うう、あんまり見たくない……！）

眼鏡を取られたままで鏡はよく見えないけれど、いつも通り冴えない猫背だ。

どうせチビでカリカリの私が映っているだけだろう。

思わず目を背けようとしたとき、真壁さんが覆い被さるように距離を詰めてきた。

逃げ場をなくすように、顎に大きな手が添えられる。

「ひえ、な、なに……っ」

「よく見ろよ」

低い声が耳のすぐ後ろで響く。

骨ばった指から伝わる体温と、ひやりとした指輪の冷たさに、なぜか心臓がどくんと跳ねた。

そのまま、くいと鏡のほうへ向かされる。

ぼやけた鏡越しに気になったのは自分じゃなくて、真壁さんの束ねられた長い髪が、肩からするりと落ちていくことだった。

「造形はいい。髪と眉だな。整え方知らねえんだろ、そこ座れ」
「うえっ……?? は、はい……っ??」

——それから。

座ったあと、まず髪に櫛を通された。

いつもなんだかごわごわしてしまいう髪の毛にオイルを馴染ませ、何度も梳かれる。

それだけでも、あれ？ 結構違うかも、なんて思っていたのに。
真壁さんは一房ずつ、丁寧にヘアアイロンを滑らせてくれた。

「動くなよ。火傷すんぞ」

作業中だからだろうか。

さっきみたいないな甘さのない、ただ低い声は落ち着くトーンで、自然と肩の力が抜けていく。

（なんか……この人、触るの上手だなあ……）

遠慮のない、丁寧すぎもしない、けれど乱雑さのない手つき。

ただ髪を触られているだけなのに眠くなるくらいだった。

それから自分ではいつもうまくいかなかった眉毛も、細いブラシで整えられ、軽く切られる。

「ううっ、く、くすぐったいい……」

「じっとしてろ。眉毛なくなんぞ」

からかうような、けれど穏やかな笑いの交じる言葉と共に迷いなく整えられ、一緒に軽いメイクまで施される。

パフひとつ当てる仕草すら、心地よくて不思議だった。

「——ほら見ろ。磨きや光るだろ」

「……う、うそお……っ？」

満足げな声にひとつまばたきをする。

確かにシルエットはすごく変わったような気がするけれど、ぼやけた視界でよくわからない。

半信半疑に声を出すと、真壁さんは「ああ、見えねえのか」と言って奪ったままだった私の眼鏡をようやく返してくれた。

せっかくしてもらったメイクが崩れないように浮かせて持ちながら、レンズを覗き込むと――

鏡の前には、まるで、別人みたいな私がいた。

（え……？　これ……ほ、ほんとに、私……??）

揺れる黒髪は、テレビで見るアイドルみたいに光を反射している。

眉のラインもすっきりとしていてなんだか女優さんみたいだ。ほんの少し色づいた頬で、不思議といつもより輪郭が引き締まったように見える。

いつもよりもずっと印象が整っていて、見違えたことがはつきりとわかった。

「すごい、私じゃないみたい……」

「可愛くなったろ」

「うわあ、えへへ……ありがとうございます、えっと、真壁……さん？」
「おう。……そんじゃ、アレ。着てみつか」

ニコツと笑う真壁さんが親指で示す先には。

あの、ほとんど紐みたいなデザインの衣装がかけられたハンガーがあった。

——そうだった。

全てはこのためだった。

騙されてる、絶対。そう思ったけれど、もう逃げろには遅すぎた。



「——ぜ、絶体絶命だあ……!!」

これが私だなんて、とても思えない。

着替え終わって、また鏡の前に立つてみたはいいものの、恥ずかしすぎて溶けそうだ。

フリルもレースも良いものが使われていて可愛いけれど、あまりに露出が多い。

頼りないほど細い紐が食い込んでいて、たいした膨らみもない胸元が強調されてしまっている。

真壁さんは「よく似合ってるじゃねえか」と言ったあと、鏡の中の私を上から下まで観察するように眺めてから、煙草を灰皿に置いて近づいてきた。

「似合ってるけど、後ろ結べてねえな。前のリボンも曲がつてる」

「うええ……っ?」

「じつとしてろ」

きゅ、と後ろの紐が少し引っ張られる。

胸元がわずかに寄って、私のなけなしの胸も少しは形が浮き上がってマシに見えた。

——いや待って、浮き上がるのは良くないような。

これ以上身体のシルエットが出たらやばい……と思っっている間に、肋骨に指腹が触れた。

「ひえっ」

「スタイルも良いな。背中丸めてねえで胸張れ、反ったほうが綺麗に見える」
肋骨から背中までを辿られる。

そのままもう片手で肩を掴まれて、く、と背筋を正された。

「へっ？ えっ、あ、こ、こうですか……?!」

「そうだ。上手。そのままでもいいよ」

まるで検品でもしているかのような手つきなのに、なぜだか心音が早くなる。

慌てているうちに、結んだ胸元のリボンをほどかれた。指輪でいっぱい
指が丁寧な手つきでサテンの生地をなめし、捻れを取って結び直していく。

「腰が細えからメイド服も悪かねえけどな。お前、こういう身体のラインが
出るやつの方が映える」

「ほ、ほんとですか……うひやつ、なに」

「ニーソとガーターねじれてんだよ」

太腿のベルトを引つ張られて肩が震えた。

ガーターベルトなんて初めてだから付け方なんてわからない。ベルトに
ついたフリルのたわんだところを伸ばされて、ずれていたリボンを太腿の
真ん中へと戻される。

ぱちん、と後ろで少し生地が裏返っていたニーソックスまで直された。

（うう、ナチュラルに足とか触られるの恥ずかしい……けど。確かに全体的
に、なんかこう、垢抜けたような……？）

まじまじと鏡を覗き込んでみると、笑ったような吐息と共に、またあの香水と煙草が入り混じった不思議な匂いが漂ってきた。

「顔赤えぞ」

「ふあ！？ そつ、それは、こんなの着てるんだから、あ、あたりまえでっ」
「はは！ 初々しくて反応良いのも良いな。人気出るぞ、お前」

そんなの、絶対絶対ぜったい嘘だ、って思うのに。

さつきからずっと、事実を言うみたいなの褒められ方をされている気がして調子が狂う。

むぐむぐと口ごもっている私に、真壁さんはまたなにか面白いものでも見るかのような視線で片眉を上げている。

それから突然——がしりと、肩を覆うように掴まれた。

「ぴぎやッ！？」

「よし。ちよつと練習してみっか」

「な、なななな、なんの、れんしゅう」

「接客の練習だよ。ほら、こっち座ってみろ」
「むりむりむりッ、ああ紐引つ張らないでえ、あーっ」

ほとんど引きずられる形でメイクルームの後ろに置かれていたソファに連れ込まれる。

店内に置いてあったものと一緒だ。二人掛けにしては狭くて、一人掛けにしては広い、不思議なソファ。

真壁さんはそこに、一人で深く腰をかけた。

「まっ真壁さん——あの、隣狭くて……私の体格だとその、座れそうになく……っ」

「お前が座れねえなら誰も座れねえよ。座んのはここ」
「ひやう……っ!？」

とすん、と。

ごく自然な手つきで腕を捉えられて、真壁さんの膝に、跨るように座らされてしまった。

(くく)なっ、なに、なにこれ……!?!?　こ、こんなことするお店なの……っ)

一気に近付く顔に、全身がぶわりと赤くなる。

慌てて顔を遠ざけようと膝を立てたのに、腰を押さえつけられてしまった。すぐそばから、射抜くような視線が突き刺さる。

真っ赤になったまま目を離せずにいたら、目元がふっと緩んで、喉の奥で小さく笑う気配がした。

「お前、名前は」

「な、なまえっ?　こ、古風で似合っていないので、言いたくな」

「向こうの店に履歴書あんだからどうせバレるぞ。教えろよ」

「ひいつ、うう、た、玉緒ですう……」

むにゅっと太腿を掴まれて情けない悲鳴が漏れた。

へろへろになつて白状すると「玉緒な」と落ち着いた声が響く。冷静だけれど、さつきよりも一段階、低いトーンのような。

「玉緒。お前、なんであそこに応募した？」

「えっ？ あ、それは……私も可愛いメイド服着て、か、変わりたいなと思つて……っ」

「へえ。じゃあこつちでもいいだろ。可愛いメイド服着てんじゃねえか」

「む、むり、せくしーすぎるし、こんな接客できな、んぎやつ」

「腕。こつち回せ」

ちつとも話を聞いてくれない。

それどころか勝手に腕を持ち上げられて背中に回されてしまった。自分から抱きついているみたいな姿勢になつてしまつて恥ずかしすぎる。

また変な声を上げてしまったし、絶対情けない顔をしている、はずなのに。

（な、なななんつ、なんか……視線が、そこはかとなく、甘い気がするんですけど……！？）

口元が緩やかに吊り上がつていて、目元はふつと緩んでいて。

さつきまでの作り物の笑顔とは違う、無防備な甘さが漂った笑い方のよ

うな気がして、勝手に頬に熱が集まった。

「慌てる割に離れねえのな」

「……へっ？ あ、ちつちが、これはその、ど、どうしたらいいか……っ」

「嫌じゃねえならそのままでいろよ」

「い、嫌っていうか……ひゃ、——ん……っ！」

首筋に、何か柔らかいものが当たってすぐだった。

ちゅ……っ♡ と吸うような音が響いて一気に肌がぞわりと粟立つ。

——どうしよう、どうしよう、絶対やばい。っていうか何これ、こんなの絶対接客じゃない。

「細い癖して触り心地良いな、お前」

「っあ、あああの、ほんとにこれ接客、んひっ」

「接客だよ、いちやキャバっつーの。イチヤイチヤするだけ。話すより簡単だろ」

大きな手が太腿をするする……♡ と撫でる。透けたスカートの中的お尻との境界線を確認するように辿られて、ひ、と喉奥から悲鳴が出た。

触り心地が良いとか、イチヤイチヤするだけとか、そういう問題じゃない……のに。

擦ったいような、むずむずするような感覚が湧き上がってきて、せめて何かに掴まっていたくて、回してしまった腕に力がこもった。

「……っふ、うう、やだあ、できない、真壁さん……っ」

「出来てる出来てる。安心しろよ、うちは服の上からだけだから。中に手入れんのは禁止」

「ふ、服の上って、だってこれ、全然布が、んや……っ♡」

今度は胸の膨らみに、ちゅっ♡ とキスが落ちてきた。

ルールを説明する真壁さんの声は、落ち着いているけれど言い聞かせるみたいな甘さもあって、なんだか余計に恥ずかしくなる。

掴まったまま軽く身を引いたら、太腿を這っていた手が背中に回ってせき止められてしまった。

（ふ、服の上からだって、知らない人にこんなさされるの嫌だし、絶対無理……！　な、なの……♡　真壁さんに……触られてると、なんか、ぞわぞわして……ううっ、だめ♡　ちゅ、ちゅってキスされると、力抜けて……ぺたん、って膝に、座っちゃう……♡）

「——ふ。いい顔」

「うえ……っ？　あ……だめ、まっ真壁さん、まって、胸、さわっちゃ……
くっ♡」

「そんなとろけた顔しといて何言っただよ。今更だろ」

ふにゅ……っ♡　すりすり♡　ふにふに……♡

片手でレース越しの胸を包みこんで、柔らかく揉まれる。もう片手がぐたりと力の抜けた身体をかき抱いていて、離れたくても離れられない。

それどころか、身体がおかしい。

撫でるみたいに辿られるのが、どうしてか——嫌じゃない。

「玉緒。店出るときはヌーブラつけろよ。つけねえと——」

「で、でない、店なんて……っあ？　ま、真壁さ……まって、そこ、や、くっあ……！♡」

「……ここ。すぐ触られちまうぞ」

カリッ♡　カリカリッ♡　くにくにくに……♡

少しかさついた長い指先が、布越しの乳首に辿り着いてしまった。いつの間にか少し尖ってしまっていたそこを爪の先で撥るように引っかかれて、今まで出したことのない声が漏れる。

恥ずかしいのに。

嫌ですって言って、降りなきやいけないのに。

腰に甘いぞわぞわが伝わってきて、それどころじゃない。

「あ……や、ふっ、ふうっ♡　んっ、んう……♡♡」

「なんだよ、案外感じやすいな。慣れてんのか、こういうの」

「ふあ……っ？♡　っちが、ちがうう、こんなの、されたこと、ない、あうっ！？♡♡　あっだめ、ちくび、こねちや、っあ、んうぐ……♡♡」

きゅむっ♡　くりくり♡　こねこねこねっ♡

質の良い柔らかな生地越しに、あつさりと乳首を摘まれてしまった。優しく指腹で刺激される度に喉が引き攣れる。

甘ったるい声が止まらなくて恥ずかしい——のに。

間近に迫る真壁さんの少し赤みを帯びた瞳が、今まで見たどのときよりも熱を帯びていて、背筋がぶわりと逆立った。

「初めてか」

「はっ初めてに、決まって……だからっ、こんなの、できにや、んむう……っ！？♡」

必死に言い訳をしようとした唇を、あつさりと塞がれてしまった。

ちゅう……っ♡　と吸い付くような音が響いて頭が真っ白になる。そのまま何を考えることもなく舌を差し入れられて、口の中がいっぱいになった。

ぬる♡　ぬる♡　と上顎を擦られる度に力が抜ける。

身体が熱くてたまらない。

(うそ、キス、されちゃってる……♡ うう、舌おつきくて、息できなくて……頭、ぼーつとしちゃう……のに♡ ぞくぞくするの、止まんない……っあ？♡ まって、乳首……両方とも、カリカリされちゃってる♡♡ ううっ、膝、降りなきやなの……だめ、きもち、いい……♡♡)

ちゅ♡ れろ♡ カリカリカリ……♡♡

キスをしているときも真壁さんは目を閉じていなかった。途中で薄目を開いたら目が合って、思わずびくっとして身体が揺れる。

構わずにすっかり凝った乳首を摘まれて、先っぽを引っかかれて。

力の抜けた身体で腰だけがへこ……♡ と揺らめいていく。

長い長いキスから解放されたときにはもう、頭の中が全部とろけてしまったみたいだった。

「っは、ふう、ふう……っ♡ も、まかべ、ひゃ……わたし、むりい……んんっ♡」

「……キスぐらいでそんな顔しやがって。やっぱ駄目かもな」

「だめって、なにが……っあう♡ あっ？ だめ、ひっぱっちゃ、あ……♡」
「店に出せねえって意味だよ」

きゅ♡ きゅっ♡ とつまんで少し引つ張られて頭に火花が散る。何を言われたのかよくわからない。店に、出せないと言われたような。じゃあもう、練習は終わりなんじゃ、って——そう思ったのに。どうしてか長い指がするするとお腹を伝って、内腿に降りていった。まった。

「っあ？♡ あっなんで、まって、下だめ、っひい♡」
「そんな本気で善がってたら、NG行為されても断れねえだろ？ っつつても……これはまだ、ギリギリセーフだけだな」
「せ、せーふって、うそ、だめ、そこは——……っあおっ！！♡♡」

ぬちゅ……♡

鼠径部をなぞっていた指があっさりとパンツのクロッチを辿った瞬間、ぬるついた音が聞こえてカッと顔が燃えるように赤くなる。

確かめるように撫でられる度、ぬちゅ♡ぬちゅ♡と誤魔化しきれない水音が響いて、震えた膝で立とうとした、のに。

「立つなよ。これはまだセーフだ。服の上だからな」

「っひ！？♡ やっ、せ、せーふじや、あっ！？♡ あ、やあつ、そこ、こすっちや、あああっ♡」

「……ふ。やじやねえだろ。やらしい顔して、こんな濡らしというて」

カリッ♡ カリッ♡♡ にゆりにゆりにゆり……っ♡♡♡

乳首をこねられてすっかり反応してしまったクリトリスを布越しの濡れた指で引つかかれ、こね回されて、あまりの快感に背筋が仰け反る。

真壁さんの視線はずっと外れなかった。

勝手にびくびくと跳ねる腰も、尖ったままの乳首も全て、余すことなく捉えられている。

「すげえ反応……クリ好きか？ 擦る度に溢れてんぞ、愛液。あー、膝濡れそ……」

「っやあ♡ も、だめ、ぬれちゃうから、だめえ、あつ、あつ、ふああ♡♡」
「濡らしていいぜ。布越しはセーフつつつたる？」

ぬちゅっ♡ カリ♡ カリ♡ カリカリカリ……ぴんっ♡

濡れそう、と言われたから必死に退こうとしたのに。追いかけてきた指が
ぷく♡ と布を押し上げて主張しているクリトリスを引っ搔いて、弾かれ
てしまった。

逃げたいのに逃げられない。

ほんのわずかに嗜虐的な色を滲ませた視線が絡んできて、それでまた勝
手に腰が浮き上がって……まるで、もっとして♡ って言ってるみたいだ。

（う♡ ぐっ……♡ だめ、布越しクリ、カリカリつてされると♡ 頭の
なか、ぱちぱちして……何も、考えられなくなっちゃう♡ どうしよ、この
まま触られたら……私、……っあ？♡ うそ、うそ、待って……だめ、パン
ツ、ずらされちゃってる……っ♡♡）

「ほら、……アウトはこれ。腰上げて嫌がれよ、直接触られちゃうぞ」

「あつまつてえ、まつ、まかべさ……あ♡ らめ、ちよくせつ、らめ、つだめえ……っ♡♡」

「——……、」

必死になって腰を持ち上げようとしたけれど、うまく力が入らない。思わずしがみついた手で背中 of 布地を掴み、眉尻を下げて縋るように見上げる。これ以上はやめてって、どうにかして言いたかっただけなのに。すつと目を細めた真壁さんが、フー……と細いため息をついた。

「……あんま煽んなよ」

「ふあ……っ??♡ あ、あおって、ないい……っんう♡」

「煽ってんだよ。お前、絶対客にその顔すんな。ちゃんと嫌がれ」

嫌がってるのに、と言おうと思ったのに、首筋にちゅつと吸い付かれて息が詰まる。

触れる唇が湿っている。

さつきより吐息に熱がこもっている気がして、不思議に思ったけれど――

―何を考える暇もなく、にゅち……♡ と、直接クリトリスを撫でられてしまった♡

「っ!？♡♡ あうっ♡ あっ♡ だめ、らめ、いやがつてる、のに……ううだめ、しごいちや、あんっ♡♡」

「……嫌がつてるように見えねえよ、ほら玉緒。腰上げろつつたろ」

ぬりゅ♡♡ ぬりゅ♡♡ ちゅこちゅこちゅこっ♡♡

一生懸命、上げてるつもりなのに。長い指が追いかけてきて、クリトリスを捕まえられて、指の腹で擦るみたいに擦られて、きもちよくて、また力が抜ける。

「ふう♡♡ ふううっ♡♡ あげ、あげて、りゅっ、うあっ、あゝー……っ♡♡」
「上げられてねえよ、今のお前はただ腰へコヘコさせて、クリしごかれてるだけ……なあ、玉緒」

「うあ、な、なにい……っ??♡♡」

「イきそうなんだろ」

低い声だった。喉奥で転がすような、ぐるぐるとした低音が耳の中に響いてきて、びくんツツ♡♡と背筋が仰け反る。

バレてしまった。

さつきからこみ上げる絶頂感を我慢して、必死に力を込めていたのに。

「ひっ、……ひ♡く、うう……っん♡や、や、イかない……っ♡♡」

「は、まんこひくひく震わせて、イきたがってんの丸わかり。いいぜ？
伊っても。ただし——」

一度言葉を切った真壁さんに、クリトリスの根本をきゅ♡と摘まれる。
そのまますりゅ……♡すりゅ……♡と、裏筋から先っぽまでを何度
も辿られた。甘く痺れるような快感が全身を巡って、イクのをこらえるのが
どんどん難しくなっていく。

「伊ったら本気の研修な。こーんな弱々の雑魚クリぶら下げて客の前に出
るわけにいかねえだろ……？」

「……ッ！？♡む、むり、けんしゅう、できにや……っあうんっ！？♡

あつ、やらッむり、さきつぽ♡♡ つぶさにやいで、えあつ、やッ、あああ
ゝゝ……っっ♡♡」

にゆりにゆりにゆりっ♡

カリカリッ♡ カリカリカリカリ……♡♡

ぬるぬるの指先で潰されて真っ赤になったそこを優しく優しく引つかか
れて、カクンッ♡ と腰が突き上がる。

へっ♡ へっ♡ と犬みたいな息が出てしまつて恥ずかしい。

やめてほしいのに、真壁さんはずつと私の本気イキを待つように、一定の
間隔でカリカリ♡ ちゅこちゅこ♡ 指を動かすのをやめてくれない。

（あー……っ♡ だめ、だめ、研修なんてぜつたい、できない……のに♡
からだのカクカク、とまなくて♡♡ イク準備、しちゃつて、あ、あつ？
♡ うう、また、キスされちゃつた……♡♡ ぬるゝって、舌入ってくる
よお……♡ だめ、舌の付け根ぬるぬる舐めるの……っあ？ あ、あ、
やばい、どうしよ、くる、イク、いく、いっちやうう……っ♡♡）

ちゅっ♡ ちゅう♡♡ ぬるゝゝゝっ♡♡
にゅこにゅこ♡ ちゅこちゅこちゅこちゅこ……っ♡♡

「んううゝ……っふあ♡ ううだめ、まかべ、さ……っああイク♡ いく、
イツ……ああーゝゝゝっ♡♡」

びくびくびく……っ♡♡

ぶるぶるっ♡ びくんっ♡ かくかくかく……♡♡

自分でしたときとは比べ物にならない、全身を突き抜けるような快感が襲う。

イっている間もスリスリ♡ 甘やかすようにクリトリスを撫でられて口を閉じられない。

長い絶頂がようやく余韻にまで変わったとき、震える内腿がぺたりと真壁さんの足にくっついてしまった。

「初めての癖して、すげえエロいイキ方……あーあ、膝ぐちちよぐちよ」
「ふあ……？ あ……うう、ごめ、ごめんなさ——っうあ！？♡」

質の良さそうなストラックスにべったりとおまんこがくつついて、やばい、濡らしちゃった、って思った——のに。

腰を抱かれて、いったばかりのクリトリスをにゅち♡ と捏ねられてしまった♡

「やつやだあ、も、もおむりっあ、あーっ！♡♡」

「言ったら、研修するって」

「やつ♡ やあ、やら♡♡ で、できない、はたらかなないっ、んひ♡」
「働かねえとしてもよ」

片眉を持ち上げた真壁さんが、震える私を見下ろした。

せつかく整えてもらった髪も顔も、もうぐしゃぐしゃになっている気がするのに。

逃さないって言うみたいなの、鋭く熱い視線で捉えられて、きゅっ喉が締め付けられる。

「ちょっとクリ弄られたくらいですぐイく雑魚まんこ、矯正したほうがいいぜ？」

「ひ……っ♡ ひい……っ♡♡ ま、まつへ、まかべ、しゃ……も、さわっちゃ、あ……♡♡」

「ああ、すげえな。とろとろ溢れてるし、入口くぱくぱ開いてる……なあ、玉緒」

にちにち♡ とゆるくクリトリスを撫でていた指が、とろとろの割れ目から愛液を掬う。

吐息交じりに囁かれる声は、低く掠れているのに、ひどく甘ったるい。

どこにも押さえつけられていないのに、見えない糸で雁字搦めにされてるみたいだった。

「初めての癖して、こんなエロい雑魚まんこ俺以外にバレちまつたらどうなると思う？」

「ふあ……？ うえ……みつか、つたら、……？♡」

声がだんだん潜められる。

思わずこくん、と唾を飲み込んだその瞬間、耳の縁へと唇が触れた。

「大変だぜ？　よわよわ雑魚まんこのエロい女いるって触れ回られて、その辺の性欲まみれのおっさんに、大事な大事な初めて奪われて、身体中に精液かけられて、あっちこっちまわされて……」

「くくづ！　や、やだ、やだ、こわいい……っ」

「そうだな、怖いよなあ？　じゃあ俺と鍛えたほうがいいだろう？」

「くく……っづ……♡♡」

ぬりゅぬりゅ♡　優しく割れ目を擦られてまた気持ちよさが戻ってくる中、畳み掛けられて頭の回路が切れていく。

抱きしめる腕も、玉緒、と囁きかける声も甘い。

駄目だって、思うのに——もう、抗えない。

弱々しく頷いた瞬間「いい子だ」と、また褒めるような口付けが降ってきた。

（中略。十回寸止めイキ我慢、M字開脚クンニ、潮吹き、口説かれ）

◇ ◇ ◇

「……こう、かな……？」

鏡の前、まだ慣れないヘアアイロンを握りしめて手首を傾ける。

今日は毛先をちよつとだけ内巻きにする方法を試しているところだ。熱いヘアアイロンに恐る恐る挟んで抜いた毛先が、ふんわりと内側に丸まった。

——よかった、うまくできた。

ほっとして鏡から洗面台に視線を落としたところで、決めた。

（よしっ。今日は洗面台、掃除しよつと！）

あれから数週間。

私はいま、真壁さんの事務所兼家だという、一軒家で住み込みのメイド見習いに勤しんでいるところだ。

都内から少し外れ、駅から少し離れたところにある、二階建ての白い新築一戸建て。

ここが何の事務所を兼ねているのかはよく分からないけれど、居心地はとても良い。

(……あ、洗剤残り少ない。買いに行こうかなあ)

ここ最近、近くの商店街に行くのが楽しみだ。

五、六軒程度の小さな商店が集まっただけの通りだが、それでも買い物には困らない。

店主はみな優しそうなおじいちゃんおばあちゃんで、まるで孫のようにかわいがってくれるのだ。

堅苦しい実家で、母親に嫌味を言われながら苦手な花嫁修業をして過ごすよりも、ずっとずっと気が楽だった。

（まあ、あんまり一人で外出るなって言われてるけど。真壁さん、今日はいつ帰って来るかなあ……）

真壁さんは毎日忙しそうだ。

あんな流れてメイドになれよなんて言われたものだから、何かとんでもないご奉仕でもさせられるのかと思ったけれど、特に手を出されるようなことはない。

ずっと優しくて男前で――

（――いや……ボディタッチは、ちよつと多い気もするけど……っ！）

泡のクリーナーを洗面台の鏡へと吹きかけながら、今までの真壁さんの様子をぼんやりと思い出す。

例えば料理を作っている間に、後ろから腕を回されたり。

夜、リビングでこっそりアニメを見ていたら頭に顎を乗せられたり。

どうにも距離が近く、主人とメイドとしての距離感かと言われるとやや疑問を感じるけれど……毎回くすぐったい気持ちになってしまつて受け入

れてしまう。

（家事手伝いも……料理と掃除と、なーんか興味なさそうにメイクの練習でもしとけつて言われて、やつてるけど。これだけでいいのかなあ）

真壁さんのいない日中は掃除に勤しんでいる。

といつても事務所のある二階には行くなと言われているので一階だけだ。料理も、真壁さんが早く帰ってきてくれた日は簡単なものを作るだけ。

あとは日々、真壁さんが教えてくれたように顔や髪を整えるぐらいのもので……正直、労働としては軽すぎる。

むしろ、何か作ったら「うめえぞ」って言ってくれるし。

メイクをちよつと練習してみたら「似合ってる」って褒めてくれるから、やつぱりメイドとしては待遇が良すぎじゃないだろうか……なんて思ってしまう。

（でも……おかげで前より、だいぶマシな見た目になった気がする……！）

眉の整え方を覚えて、眼鏡からコンタクトに変えて、ヘアオイルをつけるようになって。

あの日「よく見ろよ」と言われて鏡を向かされた時から——ずいぶん印象が変わったと思う。

鏡の泡を拭いて見えてきた自分の姿にちよっぴり胸を張り、機嫌よく雑巾を絞ったところで、ガチャリと玄関の扉が開いた。

「！ 真壁さあん、おかえりなさいっ」

まだ明るいのに帰ってくるなんて珍しい。
けれど嬉しい。

唾え煙草のまま靴を脱いで上がってくる真壁さんに急いで駆け寄った。

「おう。ただいま、玉緒」

真壁さんは今日も、ピシッとしたスリーピースのスーツ姿だ。

広い肩幅にぴったりと合うように仕立てられたベストとワインレッドのネクタイがよく似合っていて、玄関先でも絵になるほど格好いい。

けれどこちらを見る視線はどこかゆったりとされていて、あの日よりも緩やかなものだった。

「なんだ、今日気合入ってんな」

「え？ あつ、これはちよつと、試してみまして……！」

シルバーの指輪のついた人差し指が、内巻きになった私の髪にくるりと巻き付く。

ちよつとした変化にも敏感な人だ。

照れたように首を傾けると柔らかく「似合ってる」と言われて、じんわりと頬に熱が灯った。

「えへへっ……それにしても真壁さん、今日はずいぶん早いお帰りですね」「ちよつと予定空いてな。迎え来た」

「迎え？」

「おう。約束してたら、メイド服買いに行くぞ」
「あ……！」

思わず目が瞬く。

数日前のことだ。キッチンを掃除していたら油污れで私服が汚れてしまったのだが――その時に「なんか新しい服買ってやるよ」と言われ、冗談で「じゃあメイド服！」と言ったことがあった。

そうしたらなんと、ホントに買ってもらえることになってしまったのだ。仕方ねえな、今度時間空いたらな、と言われていたから……ずっと先だと思っていたのに。

「やったあ！ 急いで出掛ける準備してきますねっ」
「ふ……はしやぐな、転ぶぞ。ゆっくりでいい、煙草吸ってっから」

跳ねる私の頭をぽんと撫で、真壁さんは廊下の突き当たりの窓際に向かっていった。

甘いウツドの香水と、煙草の混じった匂いが鼻を掠める。

差し込む日光に照らされた真壁さんの、束ねられた長い黒髪がさらりと靡いて、絵画みたいに綺麗だなあ、と思った。



「へへ、えへへ……っ」

「そんな気に入ったか」

「はい、ありがとうございます……っ！」

紙袋を抱えながら、電気街の大通りを歩く。

ちらっと袋の中を覗く度に、繊細なレースが見えるのが嬉しくてたまらない。

入っているのは、ずっとずっと憧れていたメイド服の専門ショップのオリジナルデザインの衣装だ。レースとフリルがたっぷりついた、とびきり可愛い——もちろん、紐ばっかりではないもの。

何着も試着しながら選んだ、初めてのメイド服だ。

「他にも気になってただろ。あれも買ってやったのに」

「いやいや悪いですよ、こんな高いもの……！」

「高え？ 数万だろ」

あつさりと答えられて慌てて首を振った。

——真壁さんは、若干金銭感覚がおかしい気がする。

さつきも、どっちのデザインが良いですか？ と聞いてみたところ、あつさりと「どっちも買えよ」と言われて真つ黒のカードを取り出され、慌てて首を振ったばかりだ。

（カチューシャとか、パニエもセットで買ってもらっちゃったし。水商売のエリマネ？ って、そんなに儲かるものなのかな……？？）

不思議に思いつながら、ビルの立ち並ぶ賑やかな通りを歩いていく。

いつの間にか歩幅を合わせてくれていた真壁さんが、ふいに向こうを見て息をついた。

「……あー、クソ。喫煙所なくなってるじゃねえか」

「喫煙所？ あ、ほんとだ……工事してますね」

工事用の囲いがされているそこは、確か大きな喫煙所があったはずの場所だった。

気怠げにため息を漏らす真壁さんを見ているうちに、ふと思い出す。

——そうだ、確かここから大通りを外れたところに、小さな喫煙所があったはず。

私は真壁さんの袖口を引っ張り、そちらに案内することにした。

（ふふふ、足繁く通ってた甲斐あったー！）

喫煙所の近くで鼻歌を歌いながら真壁さんを待つ。

大通りから一本外れた場所にあるこの喫煙所のことは、真壁さんも知らなかったらしい。

「よく知ってたな」と言われて、少しだけ得意な気持ちになった。

(ずっとこの辺うろついてたから無駄に詳しくなっちゃったんだよね……)

実は以前から、買う勇氣こそなかったものの、この辺りのコスチュームショップをあちこち覗いて回っていたのだ。

役に立って良かったな、なんて思いながらのんびり待っていたら――

「……え、おねーさん可愛くね？」

「うわマジだ、アイドルみてえ」

「へ……っ!??」

喫煙所から出てきた、若い二人組に声をかけられた。

この辺では珍しい感じた。

渋谷や新宿なんか人居そうな雰囲気、浅黒い肌をした大学生くらいの男性二人組。やたらと声が大きかった。

「おねーさんもオタクなの? え、全然見えねー」

「髪めっちゃ綺麗じゃん。なんかそういう仕事やってる人？ あ、わかった、メイドさんでしょ」

「エ！？ いったいや、私は全然、そういうのではなくて……っ」

「あははっ、めっちゃ慌ててる。慣れてねえのもかわいいー」

どうしよう。

こんな風に声をかけられるのは初めてだ。

慌てて手を振って一歩引いたら、大股で近づかれてしまった。二人の顔が近づいて、本能的な恐怖に肩が竦む。

「ねえ、こんなトコじゃなくてさ。俺らともっと楽しいところ行かない？」

「初めてこの辺来たんだけどさあ、正直アニメとかよくわかんなくて。この辺ぶらつくより、おねーさんと遊びたいなー」

「い、いえあの私はっ……ひっ」

迫る二人に向かってぶんぶん手を振り、必死に断ろうとしているうちに突然、手を掴まれてしまった。

思わず身体が固まる。

二人とも笑っているが、どこか粘ついたような視線をしているようにも思えた。

「いいじゃん、ちよつとぐらい。な？　俺らと休憩できるところ行こうよ」

掴む手にぐつと力を込められて、やばい引つ張られる——と、そう思ったとき。

地の底を這うような、低い声が聞こえた。

「おい」

たった一言と一緒に、視界を影が覆う。

それだけなのに、周りの空気が急激に冷えた気がした。

見上げた先には、まだ煙草の匂いが纏った真壁さんがいる。

逆光で顔がよく見えない。

「手。離せ」

「……は？ な、何だよアンタ、連れ？ んだよ、ちよつと声かけただけで……っ」

「耳聞こえねえのか、ガキ。手え離せ、つってんだよ」

ゆつたりとした口調には、どこか常人離れした、冷たく重たい圧がある。数秒ほど無言の時間が流れた後だった。私の手首を掴む手からおずおずと力が抜け、離れていく。

けれど離れてなお、真壁さんの視線は揺らがなかった。感情のない瞳で、男たちを見つめている。

「……あ……えつと、す……すいませんでした……っ」

「じ、じゃあ俺らはこれで……っ」

「待てよ」

コツ、と革靴の音が鳴った。

余裕のある動きにこちらまで震えそうだ。

何も言えないまま見つめていると、真壁さんは高い背を屈めて怯える二

人組の顔を覗き込んだ。

品定めよりももっと鋭い、何かを確認するかのような視線だった。

「……お前ら」

「な、なんすか！？ 勘弁してください、もう声かけないんで……！」
「てかもう来ないんで、この辺、っうわ！？ な、何……っ」

真壁さんは突然ひとりの襟元を無造作に摘み上げ、覗き込んだ。それからついでとばかりに手元にも視線を向け——それから突然、ふっと。

興味を失ったようにあっさりと手を離し、スラックスのポケットに手を突っ込んでしまった。

何を見ていたのかはよく分からない。

けれど所作には妙に薄暗い威圧感があつて、ほんの少し背筋が冷えた。

「んだよ。ただのチンピラか」

「え！？ いやいやっ、ち、チンピラだなんて、ねえ？」

「そーそー、俺らはほら、その子が可愛かったからちよつと声かけただけで」

「俺の女だ、二度と触んな。もう用はねえよ、さっさと消えろ」

——え？

真壁さん……今、なんか、凄いことを言ったような。

思わず思考がショートしている間に、チンピラと呼ばれた二人組は風のようにいなくなつて、私と真壁さんだけがその場に残つた。

（え？ いま……俺の女つて言つたよね。言つたよね？ うん、言つた。いやメイドではあるけど、女……まあ俺のメイドだつて言われたらそれはそれで変なのはわかるけども、でも、お、俺の女つて——）

「玉緒」

「ひやいつ！？」

「帰るぞ」

考えを霧散させるような、有無を言わさぬトーンだった。

男たちに向けられていたような怜悯な圧はなくなっている。

けれど未だに警戒感を滲ませたような雰囲気で、周りから隠すように肩

を抱き寄せられて心臓が跳ねた。

見上げてみても、視線は合わない。

大通りのほうを見ていたみたいだけれど、何が見えていたのかはわからなかった。

そのまま車でまっすぐ、一軒家へと連れ戻されてしまった。



「あ、ああ、あの、真壁さん……助けてくれて、ありがとうございました……」

「おう」

どうしよう。

家に戻ってきたけれど、真壁さんの様子は戻らない。

行きの車内では雑談しながら楽しく都心に向かったのに、帰りの車では

会話はなく、返事も短いものだった。

怒ってるというよりは……何かを考えているような雰囲気だ。

それでも降りる時にドアを開けてくれて、寄り添うように肩を抱いてくれたけれど。

（うう……俺の女って言ってたの、どういう意味か聞きたいけど……なんか、聞けそうなテンションじゃない……!）

真壁さんが煙草を吸いに行っている間にこそと割り当てられている自室に戻る。

余っていたという六畳の部屋は書斎に使っていたらしい。

ミステリー小説がたくさん並んでいる本棚と、一人掛けのソファ。

今はそこに私用のお布団と、身支度用の鏡と小さなドレッサーを置かせてもらっていた。

（……。あつ、そうだ、メイド服）

怒涛の出来事があって意識から外れていたけれど、メイド服を買っても

らったんだった。

ドレッサーに紙袋を置いて、中から衣装を取り出してみる。
袋を開いた瞬間、半透明のパニエがふわりと手の中に広がった。

——かわいい。

思わずほう、と息が出た。

専門店なだけあって質が良く、袖口は繊細な刺繍のレースで縁取られている。贅沢に布が使われたスカートは、縫い目すらも美しかった。

（やっぱり、これにしてよかった……！）

真壁さんの様子がおかしくて、少し浮かない気持ちもあるけれど。
我慢できなくて、着てみることにした。

（わ……なんか、普通の服と全然違う……っ）

滑らかな布地がするすると腕を抜けていく。

以前真壁さんに直してもらったときのことを思い出して、リボンの位置がずれないように気をつける。

フリルやレースも巻き込まないように確認しながら袖を通した。

それからパニエでボリウムをつけ、ニーソックスを履き、エプロンのリボンを丁寧に結ぶ。

（よし、これで……曲がってないはず。どうか……?）

恐る恐る鏡を覗き込む。

そこに立っていたのは――

あの日、笑顔でチラシを配る可愛いお姉さんと少し似ている私だった。

フリルたつぷりのカチューシャと、ふわりと膨らんだスカートと、皺のないエプロン。

ぴしっと背筋を伸ばしてみれば随分それらしい気がして、嬉しさに唇がむずむずとした。

（こ、これなら……ほんとに、メイドさんになれちゃうかも……!?!）

そう思いながら、鏡の前で何度もリボンを直したり、パニエの位置を調整

してみたりしているとき。

「——玉緒？」

「ひゃっ、あ、真壁さん……！」

リビングに戻ろうとしたらしい真壁さんが声をかけてきた。
ドアが少し開いていたようだ。
思わず駆け寄る。

「あああのっ、ど、どうですか！？ 着てみました……！」

「おう。良いじゃねえか」

そう言う真壁さんの声は、さっきよりも落ち着いたトーンだった。
いつもの様子に戻ったことですます嬉しくなる。私は思わず浮かれた
ようにスカートを翻し、真壁さんに向かってくるりと回ってみせた。

「ちゃんと着られてんな」

ふつと笑い声と共に、穏やかな声が聞こえる。

眺める視線はどこか緩やかに細められていて、本当にほっとした。

見て欲しいところにちゃんと気付いてくれるなんて、さすが真壁さんだ。

「真壁さんのおかげで、一人で着られるようになりました！」

「ん。上出来だ」

「えへへ、これで私、メイドになれますかね！？ さっきも間違われたし…
…もしかしたら、真壁さんのお店で働けるようなメイドにも——」

そこまで言った瞬間だった。

真壁さんの目が、うつすらと細まった。

（あ、あれ……っ？）

「……さっき、間違われた？」

「あ……そ、そうなんです、あの……さっき、メイドさんでしよって聞かれて、その」

屈まれて顔がぐつと近づいた。

見上げた真壁さんの顔が徐々に陰しくなっていく。

どうしよう。さっきのことを持ち出したのは良くなかったかもしれない。でも真壁さん、どうしてそんなに怒るのだろう――。

気持ちばかりが焦っていく。

「――それで、店で働けるかもって？」

「あ……えっと、あの、め、メイドカフェのほうなら……働けるかもって……ひやうつ!？」

おろおろしながら言葉を繰り返していた瞬間、視界が反転する。

腰の後ろと膝裏に腕を回され、いとも簡単に抱き上げられていた。何を言う暇もなく二階へと連れ込まれる。

「玉緒」

「はい……っ!？」

「お前は、俺のメイドだろ」

「あ、……っ」

低く轟く声音には抑揚がない。

こちらを見る目は据わっていて怖いくらいだった——けれど。

抑え込んでいたものが溢れ出したような、そういう表情にも感じられて、なぜか心がざわついた。

（なんで、そんな顔……）

思わず何も言えなくなつて、きゅつと唇を噛み締める。

二階には行つてはいけなかつたはずなのに。

どこに連れて行かれるのだろうと思つていたけれど——階段を上がつてすぐの、手前の扉で真壁さんの足は止まつた。

（——？ あれ、ここ……真壁さんの部屋かな）

ガチャリと鍵の閉まる音が響く。

連れ込まれたのは物の少ない部屋だった。

ベッドに小さな本棚と、クローゼットと、鏡。それ以外は何もない。

いつも煙草を啜えている真壁さんの部屋としては、不思議なほど煙草の匂いのしない空間だった。

とさりとベッドに降ろされる。

「玉緒。お前、まだ店出てえのか」

「あ、えっ？ あっ、その、店っていうか……真壁さんの役に立ちたいと思つて、ひやつ」

「目的はそれだったか？ お前が言つてたのは、変わりたくて、だろ」

ぎしつと音がして、真壁さんがベッドの縁に腰掛ける。

上半身を起こそうとしたら片手で手首を押さえつけられ、ベッドに戻されてしまった。

「もう十分変わったよな？ 可愛くなつて、メイドもやつてる。好きな衣装も着られた。それとも何だ、他に欲しいもんがあんのか」

「いいいえ、そういう訳じゃ」

「ならここにいればいいだろう」

固い声音だった。

いつもの余裕が剥がれたような、どこか必死にも見える顔が覆い被さってくる。

何をされるのか、もう見当がつくのに。

自分でも驚くくらい、身体が固まってしまった。

「ここにいろよ。お前は……」

息も止まりそうだった。

抵抗ができないのは、手首を押さえつけられているから——とか、真壁さんに触れられるのは嫌じゃないから——とか。

そんな、単純な理由ではなかった。

「俺の、メイドだろう」

私を捕らえる真壁さんの視線が、まるで。

どこにも行くなと、訴えているようだったから。



ちつとも抵抗できなかったことを、今は少し恨みがましく思う。
部屋に水音が響きはじめてから、もう数十分以上は経っていた。

「あ、お♡ あっ♡ らめ、またいく、いっちや、あっううぐぐ……っ♡♡」

「……イクの早えな、何回目だ、玉緒」

「わか、わかん、にやッ、まつて、はなひて、っうあ、あー……っ♡♡」

せつかく綺麗に着ることが出来たメイド服が、汗と涙と愛液でぐちやぐちやだ。

イク度にやめて、一回離して、って言ってるのに、真壁さんはちつともやめてくれない。

ずっと私に覆い被さったまま、胸元のレースの切り替えをずり下げて、露出しているおっぱいに顔を埋めている。

グレーのシャツを捲った腕も、パニエの中に潜り込ませたまま。

骨ばった指は、スリスリ……♡ と柔らかく、指の甲でおまんこを辿っている。

「数えとけよ、こないだみたいに」

「むり、むりい……っああ♡ まっへ、いった、ばっかだからあ、ツア♡♡」

ちゅ♡ ちゅう……っ♡♡ と、しこった乳首を柔らかい舌で吸われて、ニーソックスを履いたままの足にぴん♡ と力がこもる。

——この間は、全然イかせてもらえなかったのに。
いまはもう、何回イったかわからない。

「甘イキ止まんねえなあ……今ので四回目な」

「はあっ♡ ううっな、なんで、かぞえて、っあんど♡」

「覚えろよ。俺の手で何回イったか」

熱っぽく囁かれながら、にゅち……♡ とクリトリスを捏ねられる。

どこか余裕のない声とは裏腹に、真壁さんの手つきはずっと、激しいよう
で強くはなかった。

むしろ優しすぎて少し物足りないぐらいだ。

弱火で煽るような刺激を送り込まれ続けて——そしていよいよ私が昂
ぶったとき、跳ねる腰に合わせて、イカされる。

(……も、やだ、これ、おかし……っ♡♡ よんかいも、イってゐるのに♡ お
まんこのなか、ヒクヒク止まなくなて……あ♡ また……おっぱいのさ
きっぱ、やさしく吸われながら♡ 一緒に、クリもこねられちゃってる♡
うう、なんか、どんどんイきやすくなつて……からだ、へん……♡♡)

れろ♡ れろ♡ ちゅう……♡♡

スリスリ♡ にゅちにゅちにゅち……♡♡

硬くなつてしまった乳首を吸われ、舌で転がされながら、濡れたクリトリ
スを指の腹で優しく捏ねられる。

さつきからずつとこうだ。

もう片手はおまんこのナカに指を埋め込んだまま、ただひたすら、突起に刺激を送り込まれて、何度イつてもやめてくれない。

貪るように覆いかぶさられているのに、味わうようにゆつくりと触れられて、頭がおかしくなりそうだ。

「……玉緒。見ろよ」

「ふあ……？♡ んえ……なに、っひい♡」

「でっかくなつてきてる、乳首。クリも」

「……っあえ……、っ！？♡ や、やらっ、だめッ、おつきく、しちやッ……ああお♡♡」

ちゅっ♡ こりこり♡ こりこりこり♡

にゆりにゆりにゆり……♡

一度吸い付いてから、見せつけるように口を開いて舌先で先っぽを転がされる。

恐る恐る確認した乳首は、今まで見たことがないくらいツン♡ と尖っ

ていて、恥ずかしさで全身に熱が駆け巡った。

「だめじゃねえだろ？ お前は俺のメイドなんだから」

「っ♡ そ……だけど、おっ♡ あ、あっ♡♡ らめ、しごいちや……っ
うあ、あゝっ♡」

「嘘つけよ。こうやって根本からゆーっくりされんの、好きだろ」

きゅむ♡ ちゅこちゅこっ♡ シコシコシコシコ……♡♡

すっかり勃ってしまっているらしいクリトリスを親指と人差し指で柔く
つままれる。

空いた指で包皮を引っ張られて、シコシコ♡ シコシコ♡ と何度も繰
り返し上下されて、突き抜けるような快感にまた腰が浮いてきてしまった。

「あ♡ あううつ、ズ……♡ まかべ、ひゃ♡ らめっ、これ、これえ
……♡♡」

「またイきそうか？ あー、すっげえ……ナカのうねり止まんねえな、腰も
浮いてきてる……」

「ん、やつ♡ やらあ、もお、イかな……っあ♡♡ あああッ、んうう」
……♡♡

(グー……♡ これダメ、きもちいい♡ こ、こんなすぐイくの、恥ずかしいすぎるし♡ 乳首もクリもおつきくされちやうのなんて、絶対絶対ダメなの……♡ おまんこのヒクヒク止めらんない♡♡ 勝手にまたイク準備始める♡♡ だめ、いきそうになるとナカの指、ぬちゅぬちゅ動かすの、ずるいよお……♡♡)

とん♡ とん♡ とちゅん♡ ぬちゅぬちゅぬちゅ……っ♡♡
いきそうになっっているおまんこを指でピストンされる。四回繰り返されたその動きが、ほとんどトリガーみたいになって、くんっ♡ と腰が仰け反った。

——我慢しようと、思ったのに。

真壁さんの唾液で濡れた唇が耳元へと寄ってきて——「イけよ」って、煽るみたいに囁かれて。

思考を全部攫うような快感に、成すすべもなく流される。

「ああだめ♡ また♡ またイクう、イク、イツ、ああっでちや、でちやう……♡♡♡」

ぴくんっ!!♡ ぷしっ♡ ぷしやああっ♡♡
かくかくかく……♡♡

五回目の絶頂と共に、あの時以来の潮吹きをしてしまった。

余韻で身体の震えが止まらない。

せっかくの綺麗なメイド服が汚れてしまつて、恥ずかしくて情けなくて涙が出そうだ。

「すげえな、こないだより出てる……潮吹きも癖になったか？」

「ふうっ、ふう……♡♡ うう……せ、せっかく、かってもらったのに……っ」

「馬鹿。何着でも買つてやるよ」

そういう問題じゃない……っと思うのに、かくかくと震える身体を、恋人

みたいに大切そうにぎゅうっと抱きしめられて何も言えなくなる。

そのまま耳朶をれる……♡と舐められて、耳の縁に齒を当てられて。いくたびに、一步一步、追い詰められていくみたいだ。

「欲しけりやまた買つてやる。自分磨きも掃除もしなくていい。好きな服着て、ここにいろ」

「うえ……っ？　そ、そんなのメイドじゃ……っ」

「メイドだろ。俺のそばにいるのが仕事。そんで今は——」

ぬちゅ♡　ぬちゅっ♡

にゅぷぷぷ……っ♡♡

ずっと浅い、クリ裏のところを行き来していた指が、もつと奥へと潜っていく。

快感と衝撃に声も出ない。そんな私を見つめていた真壁さんが、ふっと興奮したように笑った。

「——イキ癖つけんのが仕事。六回目。頑張れよ」

「~~~~っ!?♡ むり、そんなのしごとじゃつ、あ、っあう♡ ん、んっ♡ まって、お、おくだめ、うああ……っ♡♡」

ぬこっ♡ ぬこっ♡ にゆぶにゆぶにゆぶ……っ♡♡

骨ばった二本の指が、すっかりとろとろになってしまったおまんこを何度も行き来する。

弱いところを押されながら引き抜かれる度に遠のいていた快感が戻ってきてしまった。

ナカでの甘イキは、クリトリスでいくよりもずっと重い快感で、際限がない。

（うぐ♡ 潮吹きまで、したのに♡ もう、きもちいいの、やなのにつ……あ♡ だめ、ヌコヌコつて出し入れされると♡ またくる、きもちいいの♡ だめ、腰へこへこしちゃうの、止めらんないよお……っ♡♡）

あまりの快感に頭がぼーっとしてきて、視界もぼやけていく。

誰にも見せられないような恥ずかしい顔をしているはずなのに、真壁さんは私をずっと見つめたまま、いくたび声が甘くなつて、たまらない気持ち

が込み上げた。

「玉緒。このままイキ癖つけて、クリも乳首もでかくしような」

「はへッ、はへえ……あえっ?♡　そ、そんなっ、だめ、なんでえ……っ♡♡」

「なんでって、なあ。そしたら、もう……俺のどこしか居らんなくなるだろう?」

「っ???♡　そ、そんなことッ、……んむう……っ♡」

しなくたって、ここにいるのに。

そう言いたくて開いたはずの口は、真壁さんの唇で塞がれてしまった。

舌がこすれる。熱くて大きな舌が少しずつ探るように入り込んできては、口内をゆるゆると愛撫するように動かされる。

それから何度となく角度を変えて啄むように吸い付かれて、息ができなくなりそうだった。

真壁さんに触れられているところ全て、ぐずぐずにふやけてしまいそうだ——と。

そう思った時だった。

「真壁さあーん！ 居ますかー？」

「ッひえ、！？」

「……あ？」

明るい声が玄関から飛んできた。

驚きに身体が固まる。真壁さんも驚いたようで、低い声と共に手を止めて顔を上げている。

声は何度か聞いたことがある、若い男の子のものだった。

たぶん、真壁さんがいるときにちよくちよく二階の事務所に出入りしていた男の子だろう。わたしと同じくらいの年に見えるけれど、真壁さんは「社員だ」と言っていたような。

「居ねえんすかー？ あれ、どこだろ、届けモンの書類と、至急来てほし
いって……会長からなんですけどー！」

叫ぶ声に機嫌の悪そうな舌打ちが聞こえる。

思わず起き上がって腰を引こうとしたけれど、駄目だって言うみたいにあつさり抱え込まれてしまった。

真壁さんは、声出すなよ、と言うように立てた人差し指を口元に当てている。

慌てて頷き、両手で口を覆った。

……居留守を、使う気なのだろうか。

「寝てんのかなー……あ、そうだオレ合鍵持ってるじゃん。失礼しまーす！」

喉奥で、ひ、と微かな悲鳴が漏れる。

——うそでしょ。なんで持ってるの。

真壁さんの額にはぴきりと青筋が浮かんでいた。

どうすればいいか分からないうちに玄関のドアがガチャリと開き、勝手知ったるとばかりに廊下を歩く音が聞こえる。

(どどどどつ、どうしよう、え？　ていうか真壁さん、ずーっと退いてくれないんですけど……!?)

部屋には鍵がかかっているとはいえ、このままでいる訳にはいけないのでは。

ドアと真壁さんを交互に見ているうちに、声の主はいつも通り二階へ向かっていった。

とん、とん、とん、と階段を上がっている男の子に真壁さんは——私に覆い被さったままで、顔だけをドアの方へ向けた。

「——亘。止まれ」

「ん？　あれ、真壁さん？　なんだ、居たんなら返事くらい」

「止まれつつつてんだよ」

「うえっ？　は、はい……?」

足音が止まる。

真壁さんの声は、さっきの男性二人組にかけた声よりも更に低い、ドスの効いた声音だった。

思わずふると肩が震える。

気付いた真壁さんに自然な仕草で片手を頭に乗せられ、ぽんぽん、と柔らかく叩くように撫でられた。

「……取り込み中だ、上がって来んな。終わったらすぐ行くから、書類あんなら玄関置いとけ」

「え！？ 取り込み中……あつ、す、すみません、わかりました……！」

社員だという少年——亘さんは、驚いた声を上げて慌てて引き返したようだ。

言われた通り階段を降りている足音が聞こえて、ほっと安心する。そつと口を塞いでいた手をどけようとした——そのときだった。

「……っつっ！？？♡♡」

ぬちゅ……っ♡ と、指をまた動かされた。

思わず口をぎゅっと塞いで見上げたら、意地悪い表情をした真壁さんに「声出すなよ」と囁かれる。

(うそでしょ……っまだ、人いるのに、っあ♡ だめ、また指ズポズポされちゃってる、ううつ、それ弱い……っ♡ 声……こらえなきゃ、がまん、がまん、がまん……♡♡)

「真壁さーん、書類置いときます、失礼しましたー……！」

「おう。鍵閉めろよ」

「はーい！」

ずぼっ♡ ずぼっ♡ ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ……っ♡♡

快活な声が響く中、ゆったりと動かされる指の動きに声が出そうになる。必死に我慢するあまり、はひ、はひ、と情けない息が漏れていた。少し間があつて、玄関の扉が閉まる。

ガチャリと鍵の閉まる音と、それから少しして、バイクのエンジン音が聞こえた。

「……ったく。とんだ邪魔が入ったもんだな……ほら、玉緒。もういい、手外せ」

「はふっ、はふっ……んむ、っぷあ……ううっ♡ なっなんで指、うごかしで、ええ♡♡」

「……ふっ。お前んナカ、動かしてほしそうだったからだけど？」

「そんな、わけ、ああつ、あ♡ あんっ♡ まっへ、それ、あ♡♡ よわいからああ……っ♡」

ぬる♡ ぬるっ♡ ちゅこちゅこちゅこっ♡♡

さつきはずっと追い詰めるみたいだった真壁さんの指が、容赦なく動きはじめた。

ふるふると震えるクリトリスをつまみ、指の腹でしごく。おまんこに埋まった指でその裏をトン♡ トン♡ とノックする。

それだけでもう駄目だった。

散々追い詰められ、昂ぶり、知らない間に焦れていた身体が歓喜に震えるように反っていく。

「……惜しいな」

「あっ♡ あっ♡ あうう……っ♡♡ ん、んう??♡ なに、が……あうっ♡」

「お前とこうしてんのがだよ」

囁く声にぞわりと背筋が甘く震える。

ドアの方を刺すように見ていた視線はもう戻っていた。熱を持った瞳が絡んで、また腰が浮き上がる。

（うう……♡ こんな、こんなの……いろよって、言われなくたって……♡♡ 逃げられないのに、あ♡ だめ、腰浮いて、おまんこ勝手に締まっちゃう♡ 真壁さんの指締め付けちゃうのに♡ にゅぽにゅぽ出し入れやめてもらえない♡ ううっだめ、だめ、きちやう、もうきちやう……っ♡）

「ひ♡ ひいうう♡ まか、べ……しゃ、あ♡♡」

「いいぜ。イけよ、六回目。——俺の名前、呼んでイけ」

囁く声にまた煽られる。

びくん、と足が張って、腰全体に力がこもって、入口がきゅうう♡と締まって。

そこを無理やりこじ開けるみたいにな、にゅぷにゅぷにゅぷ……♡♡と出し入れされて、抵抗ひとつ出来ずに昇りつめた。

「んうっ、うっ、お♡ 真壁さんっ、真壁、さあん……っうう、いく、また……お♡ 真壁さんの、手で……イっちやう、あっ、いく、いつ……っあああゝゝゝ……っ♡♡」

びくっ♡ びぐん……♡♡
ぷしやっ!!♡ ぷしゅっ♡ ちよろろろ……♡♡

真壁さんの広い背中にしがみついて、頭から足先まで痺れるような深く甘い絶頂感に浸る。

二回目の潮吹きは勢いがなく、おしっこみたいで恥ずかしいのに、眺める真壁さんの瞳は変わらず、熱を孕んだままだった。

乱れっぱなしだった私の呼吸がようやく落ち着いてきた頃、ようやく。名残惜しげに真壁さんの指が抜けていった。

「……玉緒。待つてられるか」

「ふあ……あ？ はい、……行かなきゃ、なんですよね」

「おう。帰りは多分遅くなる」

気だるげに起き上がった真壁さんは、それでも柵からウェットティッシュを引っ張り出し、私の身体を拭いてくれた。

「悪いな、メイド服汚して」という、取ってつけたような謝罪には少し笑いそうになってしまったけれど。

言わなければならぬことがある気がして、少し身を持ち上げた。

「……あ、あのっ、真壁さん」

「なんだ」

「私、ここにいます。真壁さんのメイドとして……だ、だから、その……っ」

いつも伏せがちの真壁さんの目が、珍しいほど大きく開く。
ぎゅっと拳を握って、少し震える口を開いた。

「安心して、行つてきてほしい、です。ちゃんと、待つてますから……!!」
「——……」

なんとか言い切った。

どうしよう、ちよつと厚かましかっただろうか……なんて思いながら恐る恐る見上げる。

すると、いつもどこか余裕ありげに微笑んでいる真壁さんの顔が、驚くほど柔らかく緩んでいた。

(……あ。この顔……おかえりなさいって言うときと、似てる)

真壁さんはいつも、玄関で私を迎えるときにどこか和らいだ表情を浮かべてくれるけれど——いまは、その時よりも。

もつとずっと穏やかな表情を浮かべていて、きゅうつと心臓が掴まれた

ような気持ちになった。

「……おう。行ってくる、玉緒」

落ち着いた声に、今度こそほっと安心する。

そうして滑るように駐車場から出ていく黒い高級車を、二階の窓から見送った。

——けれど、それから一週間後。
私は掃除中に見つけてしまった。

恐らくペアリングであろう、サイズ違いの二つの指輪と——……
一発の、拳銃の弾を。